

# 「別府ガイド」



かこがわ人の会

平成 28 年 2 月 26 日



発行 研修部会

## 目 次

別府町の歴史	P 1
多木化学(株)本社・生家	P 1
松風こみち	P 2
光明山 宝蔵寺	P 3
別府住吉神社	P 4
多木浜洋館（あかがね御殿）	P 6
別府みなと緑地公園・海洋文化センター	P 7
阿閑城はどこに	P 7
神戸製鋼所加古川製鉄所	P 8
別府川	P 1 1

### 1、 別府町の歴史

別府は古代には御坏江（みつきえ）と呼ばれていました。英賀日記によると、昔、別府八十郎が赤松氏から、阿閑の庄、一木を賜りおさめるという記録があります。平安、鎌倉時代に一木村となって、別府村になったのは室町時代と言われています。

別府八幡神社境内にある五輪塔が別府八十郎の墓と言われています。

明治 22 年(1889 年)に別府村、新野辺村、西脇村が合併し加古郡別府村になりました。さらに昭和 3 年(1928 年)加古郡別府町になり、昭和 26 年(1951 年)加古川市別府町になり現在に至っています。別府という名前は別符からきたもので、平安時代末期に成立した土地制度の一つで荘園に属する一部区域が、国司免符などになったものらしです。

別府出身の多木久米次郎氏が多木製肥所を創業し、別府鉄道を造るなど、別府発展の基礎を築かれました。さらに昭和 43 年(1968 年)神戸製鋼所加古川製鉄所が隣接の金沢町で創業し、現在に至っています。

### 2、 多木化学(株)本社・生家

多木久米次郎氏は、安政 6 年（1859 年）加古郡別府村（現加古川市別府町）で、醤油醸造や魚肥を商う旧家の三男として生まれ、明治政府が「富国強



兵」を国策に掲げる時代。日本の国力を高めるには、食料生産能力が不可欠と農業発展の為に人造肥料の開発に取り組みました。

この生家は創業後本店の営業拠点となったそうです。

多木化学株の本社事務所の庭には、石造の布袋さん、創業当時原料の獣骨を粉末にする為に使用されていた足ふみ式の石臼は、肥料製造の記念として石碑にはめこんであります。町中のそこかしこの建物にトレードマークの神代鍬が掲げてあります。

本社前の県道 129 号線（別府港加古川停車場線）には、電柱がなく、電線のない町としても知られています。又、街路樹として珍しいハナミズキが植えられています。

### 3、 松風こみち

別府鉄道野口線の跡地で、多木化学の創業者、多木久米次郎氏が肥料輸送目的に大正 4 年（1915 年）に当時の国鉄野口駅から別府港駅まで 3.6 km の野口線でした。その後別府鉄道は昭和 59 年（1984 年）に廃線になりました。現在は、「松風こみち」として市民に親しまれています。全長約 3 km の歩行者、自転車専用道路です。市の木「黒松」と市の花「つつじ」が植えられており心が和む道になっています。

「松風こみち」は加古川市の官庁街から、別府鉄

道当時の鉄橋をそのまま別府川の橋として利用されている所を通り、静かな住宅地を通り抜け別府町に続いています。100m ごとの距離標、途中 4ヶ所の休憩所も設けられていて、市民に親しまれています。

### 4、 光明山 宝蔵寺

真言宗の寺院で本尊は阿弥陀如来座像です。奈良時代天平年間聖武天皇の勅命により、行基の開基と伝えられています。鎌倉時代、護良親王の令旨を受け、赤松円心挙兵に応じ、当時寺から僧兵、兵を出動、室町時代赤松氏の盛衰につれて寺運も盛衰、羽柴秀吉の三木城攻略の時、寺もその災禍をこうむりました。

その後、寛永年間に大火にあい、一切のものを灰燼に帰したが享保 15 年（1730 年）、別府村、西脇村、二ツ屋村の檀家によって再建されました。今の建物は昭和 6 年（1931 年）に全面改築されました。

寺に残されている鬼瓦には、三つ葉葵の紋があります。また徳川家康（初代）、家宣（6 代）、吉宗（8 代）、家斉（11 代）、家定（13 代）の将軍の位牌がお祀りされています。

明治 12 年（1879 年）パリ万博の際、2000 本のオリーブの木が初めて日本にやってきました。その中の 600 本が神戸オリーブ園に植えられました。明

治 19 年 (1886 年) 多木久米次郎氏が神戸オリーブ園から苗木を 2 本譲り受け、宝蔵寺境内に植えました。クイーン種 1 本、ミッション種 1 本です。130 年経った日本最古のオリーブの木です。この時のオリーブの木がここ宝蔵寺と神戸湊川神社にあります。

境内には奇行に富んだ瀧瓢水の筆塚があります。「浜までは 海女も蓑着る 時雨かな」「さればとて 石に布団も 着せられず」などの俳句で知られています。瀧瓢水は貞享元年 (1684 年) 別府村の裕福な廻船問屋に生まれました。家業を継いだものの、俳諧にのめりこみ財産をすべてなくしてしまいました。宝蔵寺は瀧家の菩提寺で、本堂前には瀧家寄進の一对の石灯籠があります。

筆塚の両隣には、「棋士のまち加古川」のルーツともいえる貴多文太郎六段と、十八世紀末に大相撲で活躍した別府出身力士・手柄山仁太夫の供養碑などがあります。

## 5、 別府住吉神社

別府住吉神社は別府川河口にあり、昔から漁業や海上交通の守り神として親しまれてきました。祭神は底筒男命 (そこつつおのみこと)、中筒男命 (なかつつおのみこと)、表筒男命 (うわつつおのみこと) の海の神様と息長足姫命 (おきながたらしひめ

のみこと) がお祀りされています。息長足姫命は、仲哀天皇の皇后で神功皇后のことです。別府住吉神社の創建は不明ですが、古い灯籠には貞享 5 年 (1688 年) の銘があります。

別府町は多木化学のお膝元で、別府住吉神社とも縁が深く、境内にある立派な鳥居や灯籠の多くは創業者・多木久米次郎氏が寄進したものです。境内には、「手枕の松 (たまぐらのまつ)」があります。この松は住吉大明神「航海の神様」のお告げがあり、植えられたものと言われています。松が横に傾き腕枕をしているように見えるところから、別府出身の俳人・瀧瓢水が「手枕の松 (たまぐらのまつ)」と名付けました。

瀧瓢水は千石船 7 艘を所有する廻船問屋に貞享元年 (1684 年) に生まれましたが、本業を顧みず俳句に夢中になり、財産すべてなくしてしまいました。家は住吉神社の西約 100m の今の辻堂にあったと言われています。そのあたりは別府城址ではないかとも言われています。

「手枕の松」は江戸時代の地誌、「播磨鑑」にも書かれています。初代の松は大正末期に枯れ、現在の松は 3 代目です。江戸時代の「播州松めぐり」の東端にあたり、西に向かって浜宮天神社「官公お手植えの松」、尾上神社「尾上の松」、高砂神社「相生の松」、曾根神社「曾根の松」と続いています。



また元は拝殿にあり、現在社務所内に保管されている「住吉大明神」の扁額は瀧瓢水の書いたものです。

#### 6、 多木浜洋館（あかがね御殿）

多木浜洋館は多木化学の創業者・多木久米次郎氏が、来賓を迎えるため、大正7年（1918年）着工、昭和8年（1933年）に完成した贅を尽くした4階建の洋館です。屋根、外壁に銅板を張り巡らせているところから「あかがね御殿」と呼ばれています。内部は非公開です。他に比較するものがないという意味で「同比閣」と名前がついています。平成14年（2002年）国の登録有形文化財となりました。現在は多木学園別府幼稚園が管理されています。

多木浜洋館の西側に「肥料主」と刻まれた大きな台座があります。この台座の上にはかつて多木化学の創業者・多木久米次郎氏の銅像が立っていましたが、戦時中の金属供出により銅像は取り払われ、現在は台座のみが残っています。

多木久米次郎氏は日本で初めて人造肥料を製造された人で、衆議院議員、貴族院議員なども務められ、別府、加古川の発展に大いにつくされました。鉄道（別府鉄道）や道路（多木道）を造り、別府港の整備、加古川の改修にも尽力された偉大な人物です。

#### 7、 別府みなと緑地公園・海洋文化センター

「埋め立てで少なくなった砂浜に海と触れ合う場所を残したい」という町民の強い希望で平成12年（2000年）「別府みなと緑地公園」「海洋文化センター」ができました。海洋文化センターは海をテーマにした文化施設です。クイズ形式で楽しみながら海についての理解が深められる「こちら海洋研究所」や子供に大人気の帆船アスレチックなど、海について遊びながら学べる仕掛けがいっぱいの施設です。

また館内には図書室があり、海図をはじめ海洋文化に関する資料があります。近くには加古川スポーツ交流館があります。

周辺は海の香りと芝生が広がる別府みなと緑地や海水の循環するじゃぶじゃぶ池があり、釣りやウォーキングができます。

別府みなと緑地の別府川沿いには、夜になると蛍のような光を放つ歩道があります。

夜になると工場や船のライトが別府港、東播磨港の水面に七色に輝き昼間と違った幻想的な風景が楽しめます。

#### 8、 阿閉城はどこに

NHKの大河ドラマ「軍師官兵衛」にもありまし



たが、司馬遼太郎の「播磨灘物語」に登場する阿閑の別府城がどこにあったのかとても興味があります。

阿閑城の所在地については色々な説がありますが、宝蔵寺近くの西脇戎神社もあげられています。秀吉の三木城攻めの時、三木城への食糧輸送道路として重要な位置にあった阿閑城は、城主加古政頼が織田軍との戦いが開始されるとすぐ阿閑城を放棄し、三木城へ入城、秀吉方の阿閑城入城を許してしまいました。毛利軍は阿閑城を取り返すべく、毛利・雑賀 8000 人の水軍を向かわせたが、黒田官兵衛は 500 人ほどの兵で迎え撃ち、奇策で毛利・雑賀軍を追い返してしまったそうです。

現在阿閑城社と考えられているのは、この宝蔵寺近くの西脇戎神社付近、別府本町四ツ堂付近、別府化学の工場敷地内、播磨町本荘の蓮花寺、播磨町古田の福勝寺などがあります。取り壊されてなくなった別府の阿閑城はどこだったのか興味がそそられます。

## 9、 神戸製鋼所加古川製鉄所

別府町新野辺に隣接して金沢町があります。金沢町は全部神戸製鋼所の敷地になっています。神戸製鋼所は明治 38 年（1905 年）に設立され昭和 34 年（1959 年）灘浜に高炉を造りました。高度成長時、

加古川市に進出し、昭和 43 年（1968 年）操業を開始し、昭和 45 年（1970 年）に第 1 高炉に火が入れられ、生産がはじまりました。その後日本国内では高炉製鉄所は建設されていないので、今もなお日本で最も新しい製鉄所です。1970 年代に第 2 高炉、第 3 高炉が完成し、粗鋼生産量は年間 600 万トンとされています。主製品は、船、ビルに使用される厚鋼板、自動車、家電製品使用される薄鋼板、ボルト、ばね、橋のケーブルに使用される直径 18mm 以下の線材です。

広大な敷地は、東岸壁から荷揚げされた原材料が工程順に流れ、西岸壁から製品が出荷されるという合理的なレイアウトがしてあります。高生産、低コストな世界トップレベルの高炉操業技術に挑戦しています。

工場の敷地は 580 万 m<sup>2</sup>で甲子園球場の 150 個分の大きさで、東西 3.5 km、南北 2.5 km です。

安倍首相も社会人時代、神戸製鋼所加古川製鉄所に勤務されていました。「神鋼かこがわフェスティバル」が毎年開催され地元にも親しまれています。工場のある金沢町は、人口 0、世帯数 0 の町です。

工場のある金沢町は、昔加古郡新野辺村金沢新田と言われていました。

金沢新田は天保 11 年（1840 年）東神吉町砂部の庄屋市場屋九郎兵衛が発起し、42 町歩余の新田を開墾

し、その功績により姫路城主より金澤姓を賜り、金澤九郎兵衛となりそこから開墾した新田を金沢新田と呼ぶようになったと言うことです。新野辺には開墾にまつわる民話が2~3残っています。

#### 10、別府川

別府川は加古川町大野から東播磨港（別府港）までの、全長9kmの一級河川です。加古川水系で加古川市内を流れる川の中で一番大きな川とされています。

大正2年（1913年）に刊行された加古郡誌によると、「水源を長砂村に発し、新野辺村を経て別府港に注ぐ流程20丁の川」と紹介されています。

昭和33年（1958年）ごろから、下流より川を造る工事が始まり、JR日岡駅の北で一応工事は終了しています。

川の両岸はしっかり護岸工事されていて、川になかなか近づけない構造になっています。上流からと海からの水害を防ぐ大きな働きがある川ですが、河口近くはドブ川状態です。少し上流に行くと魚、野鳥、藻、草類など色々な生物を見ることができます。

別府川は、加古川市の中心部を流れ、川の両岸には加古川市の誇る名所、名刹が点在しています。市民に親しまれるきれいな川にしたいものです。

#### MEMO 1

